

大阪府立千里高等学校
平成 29 年度 第 1 回学校協議会 会議記録

○ 日時 平成 29 年 6 月 22 日 (木) 15 : 30 ~ 16 : 30

○ 会場 会議室

○ 出席者

(学校協議会委員)

山崎 彰 武庫川女子大学健康スポーツ科学部長・教授

高木 学 江坂・起業家センター代表取締役

大森 万峰子 千里高校 学校薬剤師

砂田 信吾 千里高校 P T A 会長

大歳 哲也 千里高校後援会会長

(学校側)

校長 松本 透 首席 大西 千尋 総合科学科長 岩井 清

進路指導部長 本間 直也 第 1 学年主任 谷口 美喜夫

(事務局)

教頭 堀辺 慶一 教育情報部長 松井 活夫 教育情報部 原田 公彦

○ 議事概要

1 平成 29 年度学校経営計画 (校長より)

→ 次期学習指導要領の改定に向けたプロジェクトチームを設置し、主体的・対話的な深い学びを実現すべく「Senri Deeper Active Learning」の推進に取り組んでいきたい。

2 平成 28 年度進路結果 (本間進路指導部長より)

→ 今年度は全国的に厳しい進路状況であったが、千里生 (48 期) は国公立合格者が増加するなど一定の成果を上げた。

3 平成 29 年度入学生 (51 期) の状況

若竹セミナーへの参加生徒数が例年より多いなど、概ね順調にスタートしている

4 S G H ・ S S H の取り組み

→ S G H は指定 3 年目で中間評価の年度であるが取り組みはほぼ計画通りに進行している。また、本年度第 2 期目の指定を受けた S S H では、課題研究などに中心的に取り組む F S (Future Scientist) チームを募集したが想定以上の希望者が集まっている。

協議

1 千里高校で身につける力とは何か

→ 「知識・技能」をどのように使うのかという「判断力・表現力」が必要であり、さらには主体的に、かつ協同的に課題に向き合い解決している力を養わなければいけない。

→ 課題が与えられるのを受け見えて待つのではなく、自分で課題を見つけ解決の糸口を探る力、何をすべきで何をすべきではないかを自ら判断する力を養わなければならない

→ 「千里マップ」は高校 3 年生で終わるのではなく将来像を見据えたものにすべきである。

2 評価について

→ S S H 課題研究における評価については社会的に認められる評価指標を現在検討中である。

→ 評価は結果のみならずプロセスをも評価すべきである。

大阪府立千里高等学校
平成 29 年度 第 2 回学校協議会 会議記録

○ 日時 平成 29 年 10 月 26 日 (木) 15 : 30 ~ 16 : 55

○ 会場 プレゼンテーションルーム

○ 出席者

(学校協議会委員)

山崎 彰 武庫川女子大学健康スポーツ科学部長・教授

高木 学 江坂・起業家センター代表取締役

大森 万峰子 千里高校 学校薬剤師

羽間 博子 吹田市立竹見台中学校校長

砂田 信吾 千里高校 P T A 会長

大歳 哲也 千里高校後援会会長

(学校側)

校長 松本 透 首席 大西 千尋 総合科学科長 岩井 清

進路指導部長 本間 直也 第 1 学年主任 谷口 美喜夫

(事務局)

教頭 堀辺 慶一 教育情報部長 松井 活夫 教育情報部 原田 公彦

○ 議事概要

取組みについて報告

(1) 課題研究 (S G H) について (大西)

- ・全国 S G H 課題研究発表会の日本語プレゼンテーションの部において最優秀賞を受賞 (3/19)。
- ・8 月下旬に「国連グローバル・コンパクト」署名団体に加入。
- ・10 月上旬、企業・大学訪問研修を実施。昨年より希望者が倍増したため選考を行った。

(2) 課題研究 (S S H) について (堀辺)

- ・F S (Future Science) チームを中心に、国内研修や海外研修を第 1 期からリニューアルした内容で実施または実施予定。
- ・科学探究の中間発表 (ポスター発表) 用のルーブリックを作成し実践した。

(3) 骨太の英語力養成事業について (校長、渡辺)

- ・昨年セブ島で行った TOEIC スペシャルレッスンを、本年度はコスモスクエアで実施。
- ・SET (Super English Teacher) は本年度で終了。TOEIC のためのレッスンはなくなるが、GC (Global Communication) の授業を改変した GCP (Global Citizen Program) カリキュラムを次年度より実施予定。

(4) DAL (Deeper Active Learning) について (校長)

- ・7/5 に関西外国語大学の新坊昌弘教授を招き、「主体的で深い学びとその評価」と題する教員研修を実施。
- ・授業相互見学プロジェクトを計画。おすすめの授業を示すとともに、振り返り会を行うことで、教科を超えた意見交換の場を設定した。

(5) スタディーサポート報告 (本間)

- ・スタサポの結果から過去 3 年間の学力の変化を比較したが、大きな変化は見られなかった。
- ・一方、S3 (または A1) までの人数の推移を見ると、入学時に比べて 1 年の 10 月時点での人数減少が、45 期までに比べて 46 期以降に大きくなっている。これは、科学科が 3 クラスから 4 クラスに増えた時期

に相当しており、理系のでこ入れや1年次の数学の学力アップが課題である。

協議

(1) S G H

- ・取組みの評価は学生アンケートだけでは不十分、外部評価が必要。シラバスに意見を求めることも必要。
- ・生徒の成長評価を何で測るのが課題。

(2) S S H

- ・阪大 SEEDS・京大 ELCAS への不参加の理由は何か？
 - SEEDS は2年間、ELCAS は1年間の活動が求められ、いずれも期間が長い。一方、阪大基礎セミナーは半年間で、今年度は3名が参加した。
- ・サマースクールは、参加した中学生には好評である。

(3) 骨太・G C P

- ・クリティカルシンキングだけでなく、ロジカルシンキングが必要なのでは？
 - クリティカルシンキングをするには、当然ロジカルシンキングが含まれている。
- ・SET がなくなるのは、予算の関係なのか？
 - その通りだが、次年度以降も引き続き配置してもらえよう要望している。

(4) その他

- ・大学の授業でも簡単なルーブリック評価をしている。また、毎回レポートを書かしたりする人もいる。
 - 今回、科学探究のポスター発表でルーブリックを作成し、事前にも生徒に評価項目を知らせることで生徒の意識にも変化が見られ、よい効果を得ることができた。
- ・生徒には「考えろ」とよく言うけど、どう考えればよいかを教えていないのではないか。
 - 千里では、「探究」や「科学探究」の中の様々な取組みを通じて、また、文化祭などでも「企画書」を作らせることで、「考える」ことを実践させている。

次回 2月23日(金) 午後

大阪府立千里高等学校
平成 29 年度 第 3 回学校協議会 会議記録

○ 日時 平成 30 年 2 月 23 日（金） 15 : 30 ~ 16 : 55

○ 会場 会議室

○ 出席者

(学校協議会委員)

山崎 彰 武庫川女子大学健康スポーツ科学部長・教授

高木 学 江坂・起業家センター代表取締役

大森 万峰子 千里高校 学校薬剤師

(学校側)

校長 松本 透 首席 大西 千尋

国際文化科長 渡邊 肇 第 1 学年主任 谷口 美喜夫

(事務局)

教頭 堀辺 慶一 教育情報部長 松井 活夫 教育情報部 原田 公彦

1. 開会挨拶 (松本校長)

2. 事務局より (堀辺教頭)

3. 取組みについて報告

(1) 平成 29 年度学校経営計画の達成状況 (校長)

◇ 次の取組みにおいて自己評価が向上した。

- ・学力診断テストの結果から、上位層の増加が見られた。
- ・TOEFL テストの得点状況で目標を上回る成果があった。
- ・Deeper Active Learning (DAL) ワーキンググループを設置し、公開授業・研究協議を実施。

◇ 一方、学校教育自己診断から、「悩みや相談に応じてくれる」「将来の進路や生き方について考える機会がある」の項目において、若干だが評価が低下している。

(2) 学校教育自己診断結果 (校長)

◇ 評価が低下した項目

- ・学校で、事件・地震や火災などが起こった場合どう行動したらよいか知らされている。
- ・教室、特別教室、運動場などは、授業や生活がしやすいように整備されている。
- ・学校生活についての先生の指導は納得できる。
- ・学校で男女は平等に扱われている。
- ・学習の評価については納得できる。

◇ 評価が向上した項目

- ・ホームルーム活動は活発である。
- ・生徒会活動は活発である。
- ・千里高校に入学して良かったと思っている。

(3) 課題研究 (SGH) について (大西)

- ・千里フェスタの公開日を土曜日にしたことで、保護者の参加が大幅に増加した。
- ・また、公開日に合わせて SGH 実践報告会を実施した。
- ・評価法の整理を行い、より分かりやすいものに改善したが、どの項目においても SGH 群 (積極群) が、

そうでない生徒に比べて良い成績が得られた。

(4) 課題研究 (SSH) について (堀辺)

- ・第1期で指摘された事項の評価を踏まえ、第2期では5つのプログラム(課題発見力育成, コア生徒育成, 探究力向上, 教員指導力向上, 他校・地域への還元)に取り組んでいる。
- ・FS (フューチャーサイエンス) チームに女生徒の参加が多く見られた。
- ・課題研究に関する評価法の研究チームが発足し検討を進めている。

4. 協議

(1) 学校経営計画

- ・中～下位層の生徒に対する指導には生徒とのコミュニケーション力が必要で、指導のスキルだけではなく先生の人間力アップが求められているのではないか。
- ・51期(1年)は上位層・下位層が少なく中位層が多い。また、ちょっと怒られるとシュンとなる生徒が特に総合科学科の男子に多い。文化科の生徒の方が語学が堪能で、社交的な生徒が多い。
- ・小中学校の指導は手厚い。特に問題の多い生徒については、中学校との連携も必要なのでは。

(2) SGH, SSH

- ・SGHやSSHは全員が参加できるのか?
 - それぞれの構想の違いがあり、SGHは国際文化科の生徒を対象にしたプランでスタートしたが、希望者を対象にしたプログラムもある。また、SSHは主対象は総合科学科の生徒であるが、国際文化科の生徒にもプログラムによっては参加可能である。
- ・FSチームについて
 - 今年度からスタートしたSSHの2期目の取組みで、現在60名以上の参加者がおり、そのうち国際文化科から6名の女子が参加している。他校と異なり、本校のSSHは全員を対象とした水平展開を進めてきたが、コアな生徒の育成とその波及効果による垂直展開が今後の課題である。
- ・コアな生徒の育成によって、学力の格差が大きくなるか?
 - SGHやSSHの取組みは、学校の成績とイコールではない。興味や意欲があれば、成績の低い生徒でも積極的に取り組むことで成果をあげている。

(3) 学校教育自己診断結果, その他

- ・授業アンケートでの教員の評価と生徒の成績とはあまり相関関係がない。
- ・授業アンケートは評価の数値より、結果をどのように生徒に返していくかが大切。
- ・「学校へ行くのが楽しい」生徒が多くなったというだけでなく、何をもって楽しいのかという中身をもう少し掘り下げていくことが必要。
- ・生徒の将来の進路については、具体的なイメージを膨らませてやることが大切で、出来れば若い先生に将来像を考えさせ、それを生徒の指導にも取り入れていくと良いのでは。
- ・人権といっても、昔ながらの指導ではなく、例えばSNSなど今の生徒が身近に感じている題材を取り上げていくのが良いのではないか。